



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈育て合う〉多文化教育：札幌大学ウレシパクラブのエスノグラフィー
Author(s)	岡田, 勇樹
Citation	北方人文研究, 18, 221-240
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94493
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_11_221-240_okada.pdf



〈育て合う〉多文化教育 —札幌大学ウレシパクラブのエスノグラフィー—

岡田勇樹
(北海道大学大学院文学研究科)

要旨

本稿は、札幌大学ウレシパクラブの事例を通じて、現代日本におけるアイヌ民族に関する多文化教育のあり方を考察するエスノグラフィー研究である。まず、アイヌ民族と和人の歴史の関係性、および現代におけるアイヌ民族の置かれている状況を概観する。その上で、アイヌ民族をめぐる教育の歴史と現状を整理し、ウレシパクラブの成立経緯と活動内容を詳細に記述する。ウレシパクラブの取り組みは、アイヌ民族と和人が「育て合う」という理念に基づいた先駆的な多文化教育の実践である。本稿は、その実践を分析することで、ウレシパクラブにおける多文化教育の新たな可能性を提示することを目指す。

1. 序 論

1.1 北海道における「アイヌ民族」と「和人」¹⁾

2008年に衆参両院において全会一致でアイヌ民族は日本の先住民族として認められた。それはつまり、マイノリティであるアイヌ民族とマジョリティである和人は異なる民族であり、その関係性においてアイヌ民族の先住性を和人が認めたということになる。いうまでもなく、2つの民族間の関係性においての先住性であり、時代を遡って、その土地に一番先に居住していた民族という意味ではない。

出アフリカ以降、人類はアフリカから世界各地に拡散した。その後、長い旅路を経て、いわゆる「日本列島」に至ったと考えられている。ヤウンモシリ（現在の北海道）における時代区分や呼称については様々だが、本州の弥生・古墳時代に当たる部分が縄文時代、飛鳥・奈良・平安時代に当たる時代が擦文時代、鎌倉時代に並行してアイヌ文化期が始まる。このアイヌ文化期を「ニブタニ時代」（瀬川 2016）と呼ぼうとする試みなどもあったが、あくまで和人によるものである。従来は縄文、弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安、室町、鎌倉…といった時代区分が適用されていたが、歴史的経緯が異なる北海道と沖縄は本州と異なった時代区分で考えられるようになり、現在に至っている。そして瀬川のような試みがありつつ、時代区分そのもののあり方も議論されている（加藤・鈴木 2012）が、日本史を彩るためのアイヌ史ではないことは留意されつつも、基本的には和人による取り組みである。また、これらの時代区分は現代においてどのように過去を捉えるかというものであり、過去から現在まで人々の営みは連綿として続いており、それらが分断されたものではないこと

1) アイヌ民族に対して本稿ではマジョリティである日本人を自称でもある「和人」（海保 2006 143 など）と呼称する。

を留意したい。

商場知行制やそこから移行した場所請負制において和人はアイヌ民族を使役し、酷使したことは広く知られている。コシヤマインの戦い（1457年）、シャクシャインの戦い（1669年）、クナシリ・メナシの戦い（1789年）などは、いずれにもアイヌ民族の和人に対する不満が通底していたことは明らかであるが、全て和人によって鎮圧されている。それらは当然、その後のアイヌ民族と和人の関係性に大きく影響してくこととなる。クナシリ・メナシの戦いの後、蠣崎波響によって鎮圧に協力した12人のアイヌ民族の指導者を描いた「夷酋列像」が描かれた。美しい筆致と色使いでアイヌ民族を描いたものであるが、それは、クナシリ・メナシの戦いによって失墜した幕府からの信頼の回復を意図していたため、過剰にアイヌ民族を装飾して描いたものである。その附録には北海道がかつて倭国に属し、国際的にも認められていたという記述もあり、ナショナリズムも垣間見ることができる（中村1989:97）。また、夷酋列像をアイヌに見せることで「勸善懲惡を説く」という記述が序文にはあるが、実際にはそのような「踏み絵」としての使われ方はしていなかったようである。期せずして、現代においてこそ、そのような機能を果たすに至っているのである（桑原・川上2011:113）。

1869年7月に開拓使を設置、8月には蝦夷地を北海道と改称し、アイヌ民族が住んだ土地は「正式に」日本の一部となった。アイヌ民族を和人に同化させることを目的とした北海道旧土人保護法が1899年に制定された。土地を付与し、農業を奨励し、医療や教育等の保護対策を行うものである。多くの和人の移住者に土地を分け与えた後に残った土地には良好な土地が少なかったため、与えられた土地を開墾できずに没収されることも多く、他の保護対策も成果を上げたとは言えないような状況であった。日本人としてアイヌ民族と和人が「共存」を始めたのはこの頃と言えるが、和人が作ったこの法律はアイヌ民族を「旧土人」とし、アイヌ民族を日本人（に同化する人々）として「保護」するという目的を持ったものであったことは押さえておきたい。

1.2 「アイヌ民族」と「和人」の非対称性

アイヌ民族の全体像を把握することは困難である。「調査を受けたがらない人々」（石原2018:4）が存在するからだ。それは言うまでもなく、文字通りの意味であり、そこには「受けたがらない理由」が存在する。その理由は様々であるが、肯定的な理由は一つもないのである。「アイヌを見えなくしている抑圧的な環境に気づき、ひいては和人が自らそれを作り出していることに気づかなければ、問題は非常に小さな「点」として捉えられてしまう」のである。（モコットウナシ2019:185）

蝦夷地が北海道として組み込まれて以降、その生活を持ち崩すアイヌ民族が多数生まれることとなった。そのような状況がアイヌ民族は「劣ったもの」という差別を受けることに繋がる。「アイヌ世帯・個人主流ともいえる就業形態と職業で働く人たちの中に大勢の低所得者がいることから、アイヌ世帯全体で低所得層が相対的に多くなっているのである」（中村2010:31）と、顕著に調査結果に現れるほどに、アイヌ民族は経済的に厳しい世帯が多い。それは旧土人保護法における「保護」の失敗とも言えるだろう。2018年が北海道の150年目の節目であるが、この約150年の間、多くのアイヌ民族は貧困の中にあつたことになる。アイヌ民族に対する施策が「福祉」の枠組で行われてきたことはこういったことがあるためである。貧困は連鎖するのだ。貧困家庭であれば、高等教育を受けること/受けさせることも難しく（前田2013a）、それゆえに高収入の職を得ることもまた困難だからだ。「負の連鎖」、つまりそれを繰り返すことになるのである。そのような中で自文化を学ぶ余裕がないことは明白であるし、そうすると自文化に誇りを持つこともできず、そういったもの

を隠すようになる。北海道アイヌ協会の会員数が1989人となった²⁾(北海道新聞2024年6月2日)。これはピーク時の4割だとのもので、ここにはアイヌ民族を配偶者に持っている和人も含まれることを考えると、アイヌ協会に所属するアイヌ民族はより少ないことが分かる。上記のような状況で「調査」を受けることを拒否・忌避するのはある意味では当然とも言えよう。

現代においても、アイヌ民族であることはメリットよりもデメリットの方が多い。前述の通り、貧困であればより自文化を学ぶ機会は少ないし、その余裕もない。その結果「調査を受けたがらない人々」が生まれることになる。アイヌ協会に所属することはよりハードルは高い。『2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』での民族意識についての設問で48%が「全く意識しない」という結果になっている。「アイヌ民族ではない」ということになるだろう。自認を抜きに、アイヌ民族だと言えるだろうか。

民族、本稿で取り扱うのはアイヌ民族であるが、アイヌ民族の要件としては、まずその血統・系譜にあり、それに加えてアイヌ民族であるという自認が必要だろう。アイヌ民族として生きること志向する以前に、意識すらしないのであれば、アイヌ民族と見做そうというのは無理がある。残念ながら、すでにそういった人たちは選んだ/選ばざるを得なかったかのいずれにしても、同化政策の文脈での「同化」をしてしまったと言えよう。そういった状況の中でも、特にこの北海道においてアイヌ民族と和人は「共存」している。それは結果として、現実としてそうになっているだけなのであって、向き合っている関係性ではない。ただ、触れていないだけなのである。アイヌ民族について語ろうとすると「寝た子を起こすな」と言われることもあったということを耳にすることは多かった。同化政策を経て、それでも存在するアイヌ民族と和人が自らの民族に対しての自認を持って向き合うということはどういうことなのだろうか。それに実際取り組んでいるのが札幌大学ウレシパクラブ（以下、ウレシパクラブ）である。大学という教育機関に設立された団体の活動を通じて、異なる民族同士がお互いのアイデンティティを認め、向き合うことというのはどういうことなのか考えたい。ひいては、この問題は北海道、日本の問題でもあるとも言える。他民族のアイデンティティを認めるのか/無視するのかによってたどり着く未来は大きく異なるだろうからだ。

2. アイヌ民族を巡る教育の歴史と現状

かつてのアイヌ民族にとっての教育の場は家庭であり、そのコタンであった。生活の中で、言語や生きる知識を身に付けていた。長らく文字を使用しなかったため、口承によって伝えられていた。それは蝦夷地が北海道に組み込まれることで、変容せざるを得なくなった。変わらないという選択肢はなかったのである。

1880年代の「初期アイヌ学校」では教育現場において「説諭」する際にもアイヌ語を介する必要があるほど、アイヌ民族は日本語を理解できていない状況であった。言語が異なるため、コミュニケーションが成立しないのである。その結果、便宜上、アイヌ民族の教員を養成しようという構想があった。しかしそれは、通訳や目指すべき「手本」といった意味合いであって（小川1997:75）、アイヌ民族をエリート化することを目的としたものではなかった。同化政策の文脈であり、「アイヌの窮乏をアイヌ自身の「頑迷」「無知」と一般移民や場所請負人などの所業のせいだとし、天皇や政府や県はそんなアイヌに救済の手を差し伸べる存在であるという喧伝と、教育によってアイヌは

2) 北海道新聞「北海道アイヌ協会、会員2千人割れ ピーク時の4割まで減少 札幌で総会」(2024年6月2日) <https://www.hokkaido-np.co.jp/article/1019692/> [2024年6月30日閲覧]

シャモに「愚昧視」される境遇から脱却できる」(小川 1997: 76) という、差別的な認識に基づいたものであった。アイヌ語はもちろん、衣服や習俗については野蛮なものとされ、それを改めるように強制されるため、多くは学校に通わず、また通わせなかった。

和人によるアイヌ教育が困難を極める中、キリスト教宣教師によるアイヌに対する教育活動が始まる。CMS (Church Missionary Society) はジョン・バチラーが所属した組織であり、私設学校としてアイヌ学校を設置した。それが「CMS 函館アイヌ学校」である。その授業の中には、アイヌ語の読み書きも含まれていたが、目的はアイヌ民族の教化であった。つまり、「明治政府による「アイヌ学校」も CMS の「アイヌ学校」も、アイヌの宗教や文化、伝統的な暮らしを否定し「文明化」させるという植民地主義的使命を持っていた点において、表裏一体の関係にあった」(田辺 2022: 279) のである。同様の「愛隣学校」はアイヌ民族である金成喜蔵らの嘆願により、幌別にも存在した。「特設アイヌ学校」はいわゆる「旧土人学校」であり、目的はアイヌ民族の和人への「同化」であるため、CMS の「アイヌ学校」のようなアイヌ語の読み書きは当然含まれていない。

「多くのアイヌにとって「旧土人保護法」は自分たちのおよそ関知しないところで制定されたと見るべき」(小川 1997: 133) と小川が述べているのは真実であろう。アイヌ民族と和人の関係性において、管見の限り、ここまでアイヌ民族が和人に要望し、実現したものはないはずである。「保護」も「教育」も「同化」もアイヌ民族は望んでいなかったのである。

しかし、それより少し時代が進み、比較的裕福か、指導者的立場のアイヌ民族が学校設置の土地や資金について提供する等、アイヌ民族の子弟の就学を進める動きを見せる。すでに蝦夷地は日本となり、自分たちも日本人となり、現実的に学校で学ぶという選択肢を選ばざるを得なくなったということであろう。そこには選択を突き付けられた結果があるのみであった。その後、当然急激に就学率は上昇した(小川 1997: 162-163)。一方で、アイヌ語やアイヌ文化は置き去りにされていくこととなった。それもまた、アイヌにとって苦渋の決断であったことは想像に難くない。そして 1937 年には特設アイヌ学校が全廃となり、「別学」であったものがアイヌ民族と和人が「共学」となった。

1984 年、北海道ウタリ協会総会で「アイヌ民族に関する法律(案)」が採択されるが、その中で「第三 教育・文化³⁾」において、アイヌ民族自身による教育権の主張がなされた。その後、北海道

3) 「アイヌ民族に関する法律(案): 第三 教育・文化」について下記に引用した。

北海道旧土人保護法のもとにおけるアイヌ民族にたいする国家的差別はアイヌの基本的人権を著しく阻害しているだけでなく、一般国民のアイヌ差別を助長させ、ひいては、アイヌ民族の教育、文化の面で順当な発展をさまたげ、これがアイヌ民族をして社会的、経済的にも劣勢ならしめる一要因になっている。政府は、こうした現状を打破することがアイヌ民族政策の最重要課題の一つであるとの見解に立って、つぎのような諸施策をおこなうこととする。

- 1 アイヌ子弟の総合的教育対策を実施する。
- 2 アイヌ子弟教育にはアイヌ語学習を計画的に導入する。
- 3 学校教育および社会教育からアイヌ民族にたいする差別を一掃するための対策を実施する。
- 4 大学教育においてはアイヌ語、アイヌ民族文化、アイヌ史等についての講座を開設する。さらに、講座担当の教員については既存の諸規定にとらわれることなくそれぞれの分野におけるアイヌ民族のすぐれた人材を教授、助教授、講師等に登用し、アイヌ子弟の入学および受講についても特例を設けてそれぞれの分野に専念しうようにする。
- 5 アイヌ語、アイヌ文化の研究、維持を主目的とする国立研究施設を設置する。これには、アイヌ民族が研究者として主体的に参加する。従来の研究はアイヌ民族の意思が反映されないままに一方的におこなわれ、アイヌ民族をいわゆる研究対象としているところに基本的過誤があったのであり、こうした

ウタリ協会は北海道知事、北海道議会に対して実現するよう陳情もした。これがそれまでのものと一線を画すのは、アイヌ民族自らがこれら先進的な法律案を作成したということである。

上記「法律（案）」の6項目のうち、1・2ははまだ実現していないが、アイヌ子弟に限らなければ、二風谷小学校での取り組みがある。しかし、これはアイヌ民族がアイヌ民族子弟への教育として考えたものであるから、実現していないと判断して差し支えないだろう。3についてもやはり実現には至っていない。教員や指導者が十分な知識を持っていないことも原因であろうが、こと「差別」については特に忌避する傾向があるため、実現はより困難だろう。4の大学教育での「アイヌ語、アイヌ民族文化、アイヌ史等についての講座を開設する」の部分については実現している。しかし「講座担当の教員については既存の諸規定にとらわれることなくそれぞれの分野におけるアイヌ民族のすぐれた人材を教授、助教授、講師等に登用し、アイヌ子弟の入学および受講についても特例を設けてそれぞれの分野に専念しうるようにする」というものに関してはどうだろうか。アイヌ民族の大学教員は近年、幾人かが見られるがおそらくは「既存の諸規定にとらわれることなくそれぞれの分野におけるアイヌ民族のすぐれた人材」という部分が重要なのであろう。エカシ・フチといった人々を想定しているものと考慮すれば、やはり至っていないと言わざるを得ない。5については実現したと言っても差し支えあるまい。「アイヌ語、アイヌ文化の研究、維持を主目的とする国立研究施設」については、この間、国立アイヌ民族博物館が設立された。博物館であり、研究施設でもある。また、多くのアイヌ民族職員が勤務している。アイヌ民族の職員も多数在籍しているため「アイヌ民族をいわゆる研究対象としているところに基本的過誤があったのであり、こうした研究のあり方」についてはより慎重になるはずである。6については、国立アイヌ民族博物館が中心的な役割を果たすものと思われる。アイヌ民族が自らの未来（本稿では教育のみについて言及）について取り組んだこの法律案は非常に重要であろう。

『ボロ・リムセー少数民族懇談会 23 年の歩み―』（少数民族懇談会 1999）もまた重要である。アイヌ民族が取り組む少数民族懇談会のもので、特に教員自らが提言・報告をしていることである。その中ではやはり差別について多く言及されていることから、大きな問題であることが窺い知れる。生徒の感想も掲載されており、当時のリアルな差別を知ることができる。軽重問わず、多くの問題が存在していたのである。また、教員側の問題についても具体的に述べている。どういった教材を使うか、どういったトピックをどれだけの時間をかけて教えるか、教員の知識不足を補う研修会の提言など、実務者だからこそその視点がある。いくつか指摘されているのが「多文化教育」と「民族教育⁹⁾」である。民族教育については「民族の文化・歴史を伝えながら民族の誇りを育てていくものです。できるだけ民族の中から指導者を育てる必要があります、対象はその民族の子弟が中心になります」とアイヌ民族自身がアイヌ民族の子弟に教えることを想定しており、また多文化教育については「これは主として多数者が少数者をより理解するために行われる、多数者側からの教育といえま

研究のあり方は変革されなければならない。

6 現在おこなわれつつあるアイヌ民族文化の伝承・保存についても、問題点の有無をさらに再検討し、完全を期する。

4) 民族教育の例としては朝鮮学校が知られている。朴は「一世にとって、朝鮮学校は朝鮮民族そのものがあります」（朴 1997）と述べているように、日本における朝鮮学校は朝鮮民族にとって重要な存在であることが分かる。近年、アイヌ民族は海外、特にマオリとの交流が盛んに行っているが「日本における「多文化共生教育」の発展を語る上で、在日韓国・朝鮮人教育は、質・量ともに重要な位置を占めてきた」（岸田 2001）とあるように、国内の民族教育や多文化共生教育に目を向けることも必要であろう。

す」(小松 1995) というように、視点がマジョリティ側に移る。非常に対照的であるが、つまりは双方向のものを同時にと言い換えることもできよう。

前述のように、アイヌ民族をめぐる教育を概観した。本来自由であるべき教育が、同化政策において、和人主導のものとなり、アイヌ民族の言語を含めた文化や生活そのものが一変し、和人のそれに同化するための「努力」を強いられたのである。その後、アイヌ民族自身も、過去・現在・未来を見据え、教育がどうあるべきかを模索していた。北海道ウタリ協会総会で採択された「アイヌ民族に関する法律(案)」、『ボロ・リムセー少数民族懇談会 23 年の歩み』で見られるような教育現場での取り組みがあったことはもっと知られるべきであろう。

1997 年には「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」、つまり当時の「アイヌ新法」が施行され、2000 年代になり、2008 年にアイヌ民族が衆参両院全会一致で認められ、その 2 年後に札幌大学に「札幌大学ウレシバクラブ」が設立された。前述もしたが、これはアイヌ民族と和人が一緒にアイデンティティを明らかにし、アイヌ文化を学ぶことを通じて、お互いに「育て合う」という団体である。アイヌ民族と和人が「育て合う」ことも重要であるが、それと同じくらいに重要なのは「団体として存在する」ということである。「アイヌ民族に関する法律(案)」は法律であるため最終的には国会の範疇であるし、『ボロ・リムセー少数民族懇談会 23 年の歩み』は実務者であるという強みはあるものの、個々の負担は大きい。しかし、札幌大学ウレシバクラブは設立した時点で存在し、すぐに活動を始めるのである。このスピード感がなければ実現は難しかったかも知れない。

3. 多文化教育とアイヌ民族

「多文化共生」という言葉は広く知られているものの、実際にその内容について十分に理解されていないのではないだろうか。それを教育現場に当てはめることはより難しいかも知れない。「多文化共生に向けた教育の取り組みの多くは、主にマイノリティである外国人児童生徒のための教育支援として語られ、実践されてきた。しかし、多文化共生に向けた教育の取り組みはマイノリティの外国人児童生徒の問題としてとらえるのではなく、その差別構造を支えるマジョリティの日本人児童生徒の問題としてもとらえる必要がある。なぜならマジョリティの意識変革なくして多文化共生はあり得ないからである」(森茂 2009: 96) とあるように、多文化共生はただ同時に存在するだけでいいというわけではない。相互理解が必要であるし、ルールを含めた環境の整備も必要である。また、それ以前に「多文化共生」への障害となる差別を解消しなければいけない。それは差別をするマジョリティ側がすることであって、差別されるマイノリティ側がすることではない。ごく当然のことであるが、マジョリティにとっては認めたくない問題であり、触れたくない問題である。何故なら、マジョリティは「共生」しないことでのダメージはなく、それに対して労力を払うということを「面倒である」と感じるからである。「痛みを伴わない」としても「労力が必要である」としても、いずれにしても「多文化共生」を志向するのであれば、それに向けた教育が必要であろう。「多文化共生に向けた資質形成を目指す教育が多文化教育」(森茂 2009: 98) ということだ。

「多文化教育」は、もともと 1960 年代の黒人文化運動に端を発した「少数民族文化研究」(ethnic studies) に始まり、1970 年代を通じて、マイノリティ(少数民族など、社会的に不遇な立場におかれているとみなされる集団ないし人々の範疇)の文化を尊重することを基盤にして社会的不遇の解消、平等で公正な処遇の実現を目指す教育の思想・実践として発展を遂げてきたものであり、「多文化教育」(multicultural education) の他に、「多民族教育」(multiethnic education) とか「異文化

間（相互理解）教育」(intercultural education) と呼ばれることも多かった。しかし、1980年代に、その対象が、女性や障害者等にまで拡大されるに及び、より総括的な「多文化教育」という用語が一般化し定着するに至った」(江淵 1994: 19) ということで、多義的な概念と言える。近年、「共生教育⁵⁾」という分野も生まれているが、何を教育するのかということについては内容よりも、属性によって排除しないというインクルーシブ教育と言ってもよいだろう。

アイヌ民族のための学校、まずそれを教えるための指導者の育成を盛り込んだ民族大学(清水 2014) を求める動きがあった。清水によると、アイヌ民族のための義務教育ができる学校をを検討した際にやはり義務教育では難しいという結論に至り、大学の設立という方向性に落ち着いたようだ。義務教育学校については制限も多く、より困難であろうが、現時点で大学に着いても絶望的な見通しであることは確認しておく必要があろう。少子高齢化社会であり、物価高に加え、大学の学費も上がる見通しである。そして私大も減少する見込みであることから、新たに「民族大学」ということは限りなく難しい。

かつて萱野茂は平取町二風谷に保育所を作り、そこで幼児を相手にアイヌ語教育を行おうとした。それが頓挫した理由は「それは文部省管轄の幼稚園ならともかく、厚生省管轄の保育所での言語教育は認められない」(本田 1997: 19) というものだった。その後、萱野が、幼稚園でのアイヌ語教育、そのほかの民族教育を検討した場合、実現したのだろうか。ともあれ、この動きは現在に至るアイヌ語教室へと引き継がれることとなったものである。

大学を含めた学校、教育機関の新たな設置、民族教育の場ということを考えると、困難な道のりである。そうしたことを踏まえ、先述のウレシパクラブなのである。ウレシパクラブは先住民族に限定された狭義の民族教育の場ではないし、またそれを始めるには年齢的にもいささか遅いとも言える。新たに大学を、建物を作るのではなく、ただ、すでに存在する札幌大学で設立し、事務局は大学の一室を借りているだけである。それは今も変わらないが、そこから始まり、今に至るのである。もちろん、交渉や手続きなど、見えない部分の労苦を挙げれば切りがないのだろうが、空間としての身軽さは見事という他ないだろう。2010年の設立時には先駆的取り組みということで、マスコミなどの取材を多く受け、その後ウレシパクラブに関する論文もいくつか発表されている。しかし、現在も同様の取り組みは他になく、唯一の存在である。アイヌ民族を含む多文化教育を実践できる教育現場はウレシパクラブの他にない。

現在、平取町二風谷で実施されている伝承者育成事業⁶⁾ や、今年度より阿寒湖で実施されているアイヌ工芸等担い手育成事業⁷⁾ といったものもあるが、いずれも定員が4名と小規模である。そして、どちらもアイヌ民族の子弟限定ではないため、先住民族教育というよりは、「文化の担い手育成」としての色合いが濃い。それはあえて言えば「アイヌ民族が存在しなくても成立する」のである。例えば、それらの事業に和人のみが応募し、参加が決定したとする。そして「文化の担い手」とし

5) 大阪大学 人間科学研究科 共生学系 <http://kyosei.hus.osaka-u.ac.jp/about/future04/>

6) 公益財団法人アイヌ民族文化財団「アイヌ文化の伝承者育成／伝承者育成事業（昼間型）受講生募集要領」https://www.ff-ainu.or.jp/web/news/files/bosyu20220817_00.pdf (2024年11月15日閲覧)、「伝承者育成事業受講生募集要領（アイヌ文化の伝承者育成事業）【実施要領（夜間型）アットゥシコース】」https://www.ff-ainu.or.jp/web/news/files/densho2022_01_s.pdf (2024年11月15日閲覧)

7) 阿寒アイヌクラフトセンター「アイヌ工芸等担い手育成事業」次世代アイヌ工芸技術伝承者 募集要領 https://www.city.kushiro.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/014/800/youryou.pdf (2024年11月15日閲覧)

での教育を受ける。募集要項に要件として記載されていない以上、「和人がアイヌ民族の代わりにアイヌ文化の担い手となる」ということである。これについては検討が必要であろうが、アイヌ民族が現代に存在する以上、アイヌ民族の子弟が前提として運用されるべきである。それぞれの事業は文化継承において重要な役割を担っていると考えるが、多文化教育という性質ではないので、本稿ではアイヌの子弟の存在を前提条件とするウレシパクラブとの比較対象として掘り下げることはしない。

「何よりも重要なことは、アイヌ民族学生も和入学生も同じ土俵で学び合う、育て合うという「ウレシパ」の基本理念がこのプロジェクトの根幹に据えられていることであろう。とりわけ、アイヌ文化の学びをとおしてアイヌ民族と和人が相互につながり、連帯する場が広がってきたことは特筆に値しよう」(前田 2013b)と前田が述べたように、「ウレシパ(育て合い)」なのであり、多文化教育のとも言うこともできよう。

4. 調査の概要

本稿にかかる調査の概要であるが、ウレシパクラブを内側から描き出し、それを通して現代日本におけるアイヌ民族に関する「多文化教育」を明らかにするという研究目的のため、関係者とのインタビューを実施した。今回はウレシパクラブ代表理事を務める本田優子教授とのインタビュー収録した。研究の詳細に関する説明をした上で、調査協力の合意を得るインフォームド・コンセントの手続きを踏んだ。また実名を掲載する許可は本人から得ている。本田教授は言うまでもなく、研究者であり、萱野茂の弟子でもあり、二風谷時代に萱野のアイヌ語辞典編纂に関わる。そのため、紙幅も多くなった。現在在籍する学生や卒業生、教員やその他関係者などのインタビューも検討したが、今回は本田教授1名に絞った。ウレシパクラブに関する論文は幾つかが発表されているのが、15年を通じて関わり、なおかつ内側からウレシパクラブを明らかにする必要があるということで調査協力を得ることができた。また、ウレシパ奨学生1期生でもある筆者の経験を通じて、実際の活動現場での参与観察や、筆者自身のオートエスノグラフィーを含む。何故なら、ウレシパクラブ創設以来通じて内部にいるのは本田教授と私のみであるためだ。本田教授を含む研究対象者には、研究目的・方法、自由意思による参加、個人情報の保護について口頭で説明を行い、同意を得ている。

5. ウレシパクラブの成立経緯

「逆差別」という語は、一般に社会的弱者などに対してアファーマティブ・アクション等の優遇措置を取ることによって、その対象外の人々からのその不均衡などに対する批判である。それはアファーマティブ・アクションが既に存在する格差を是正することを目的とするものであり、単に「優遇」されているのではない。それを「優遇」と見なすこと自体が誤解であり、理解不足の証左でもある。しかし、その格差の是正が不要であると考えた人々にとっては単なる優遇措置でしかない。そして実際にはそういった人々は一定数存在するものである。

ウレシパ奨学生制度を含むウレシパ・プロジェクトを立ち上げる際には学内から少なくない反発があった。まさにそれが前出の「逆差別」であるという指摘である。アイヌ民族に対する差別の存在は知られているものの、アイヌ子弟に奨学金を支給し優遇することが和入学生に対する差別ではないかという指摘などである。またアイヌ民族が注目されることで起こる「差別」の議論を懸念し「寝た子を起こすな」という意見もあったということである。しかし、それらがウレシパ・プロジェクトのみならず、アイヌ民族に対するマジョリティの差別・偏見そのものである。そういったもの

を俎上に上げ、説明を繰り返し、今に至るのである。

2010年4月、札幌大学で「育て合い」を意味するアイヌ語を団体名に冠した札幌大学ウレシパクラブ（以下、ウレシパクラブ）が設立された。2008年にアイヌ民族が先住民族と認められ、2009年に札幌大学内で調整を行い、2010年に設立という、時代の流れを上手く読んだということができるかも知れない。

二風谷にいた時からアイヌの若者たちに進学の手を開きたい、これは本当にそう思っていて、名前は出せないが、なんとかそういう道って開けないものかと相談していた。その他には、どこかの先生にもご相談して、やっぱり皆さん「本当にそうですね」っておっしゃってくださるけれども、やっぱり本気で頑張ってくださいらなかった。でも、願いとしては二風谷にいた時代からあった。なんとか高等教育の手を開きたい。で、あともう一つはアイヌ文化をやっぱり二十歳前後の、そういうやっぱり自分というものをちゃんと考える年代でアイヌ文化を学ぶ、そういう場所が欲しいということも思ってた。私は二風谷のアイヌ語教室をずっとやらせていただいていた、子供たちにアイヌ文化に触れる機会を与えることの重要性も分かっているけど、やっぱり、自分の人生を考えると、人生で二十歳前後のものすごく大きい。だから、その時にアイヌ文化を学べば絶対好きになるからっていう確信はあって。だから、そういう場を何としても作りたいっていう風に、それは二風谷にいた時から思ってた。それから自分が大学に関われることになるなんて想像もしていなかったが、誰かにやってほしいなって思ってた。まあお願いしてたがやっぱり難しかった。（2024年6月27日筆者インタビュー）

上記は本田教授に行ったインタビューである。ウレシパクラブ設立は二風谷時代から構想があり、二風谷から札幌に出、働きながら、札幌大学に職を得た際に実現という流れである。実際には二風谷を訪れる研究者らに働きかけていたことが分かる。しかしそれが実現しなかったため、自らが、というわけである。その研究者らが本田教授の働きかけに応じ、取り組んでいたら、それは実現しただろうか。

私は札大には本当に感謝してるけど、この仕組みが札大のウレシパクラブとかウレシパ・プロジェクトだけでなく、道内は全国まで言うのはちょっと難しいけど、道内のいろんな大学でやって欲しかった。だからうち（札大）は文系しかないし。でもアイヌの若者で理系に進みたい子も絶対いるわけだし。だから、そういう大学で本当にやってほしいなと思ってた。それぞれが自分の大学の強みを生かして、あのアイヌの若者たちに奨学金を出しながら育てるということが北海道で広がっていけばいいなって本気で思っていて。ある研究者がこういうのは自分もやりたいんだとおっしゃった。ぜひやってくださいっていう風に言った。札大だけだと、やっぱり狭いからちっちゃいからやってください。という風にお願したんだけど、是非やってくださいって言ったら引いてしまう。やっぱり、現実の難しさということもあるんだと思うんだけど。札大だけだね。なんかそのメインストリームにならないんですよ。せめて北海道のそれが当たり前なような空気感が生まれればよかったのに、私の力不足なんだけど、もうちの大学だけって感じ。そういうこともあったから、なんかそのうちに同じようなことをやってくれる大学が生まれるんじゃないかと思ってた。だから、今の形はとりあえず過渡期の姿で、みたいな感覚はちょっと思ってたよね。（2024年6月27日筆者インタ

ビュー)

上記は筆者が過去に本田教授が「ウレシパクラブは永続的なものではない」といった趣旨の発言をしたことがあり、それについて聞いたものである。筆者を含めて、それを聞いていた学生はウレシパクラブが役割を終える日が来たら解散、と思っていたと思われる。しかし、このインタビューにより全く逆の構想を本田教授が持っていたことが分かった。ウレシパクラブやウレシパ・プロジェクトを他大学が始めた際、次のレベルでの取り組みが始まるという意味合いであった。しかし現実にはそうならず、他大学でのそれらが生まれることはなく、北海道の空気感を大きく変えることができず、過渡期が現在まで続いた、とも読める。しかし、捨て石のようにではなく、そこから地道な活動が始まったのである。

もうやっぱりね。野村理事長⁸⁾とかああいう風に「ウレシパ」という言葉を発信されていた方々がいたからいいなって思いはあって。でも確かに萱野先生もウレシパを文脈としては「暮らし」っていう意味でおっしゃっているから。あれはちょっと間違ってるんじゃないかみたいに言われたりもするけど。あそこのセンター⁹⁾の名前で使っている。それは明らかに「子育て」で。ある意味の「暮らし」ってことででもないから、本当に語源から来てるんだろうなと思って。で、途中で気づいたんだけど、仮に「暮らし」っていうことを文脈上で使っていると、この「暮らし」っていうのが語源が「育て合う」っていうことが何とも素敵だっと思うで、それから子育てっていうこと言われているけれども、「子育て」の語源が「育て合う」っていうふうなことだっていうのはすごいなって。アイヌの世界観が現れているんだと思っている。(2024年6月27日筆者インタビュー)

「ウレシパ」の言葉をなぜ使用したのか、という問いへの回答である。インタビュー内にもあるように、「ウレシパ」の意味合いが違っていると指摘されたことにも言及している。突然降ってきたものではなく、先人が使用していたものを選んだ、ということである。

6. 「ウレシパクラブ」と「ウレシパ・プロジェクト」

ウレシパクラブは札幌大学とウレシパクラブによる「ウレシパ・プロジェクト」の活動母体である。ウレシパ・プロジェクトとは「札幌大学にアイヌの若者たちを毎年一定数受け入れ、未来のアイヌ文化の担い手として大切に育てるとともに、多文化共生コミュニティーのモデルを作り出そうとするユニークな試み」¹⁰⁾であり、「学生だけでなく一般市民や志の高い企業とともに、ウレシパ・プロジェクトを推進する組織」¹¹⁾であるとウレシパクラブのホームページに記述がある。ウレシパクラブは当初からサークルや部活動と見做されることがままあった。しかしそのいずれでもなく、現在は法人化し、独立した団体でもある。それは札幌大学と決別したわけではなく、団体としてよ

8) 野村義一北海道アイヌ協会理事長(当時)。「ウレシパモシリ」の語が使用される最も知られているのは1992年12月10日国連総会「世界の先住民の国際年」記念演説であろう。

9) 北海道大学の「アイヌ シサム ウレシパ ウコピリカレ ウシ/アイヌ共生推進本部」

10) 一般社団法人札幌大学ウレシパクラブ「ウレシパクラブとは…？」(<http://urespa-club.com/concept.html> [2023年7月9日閲覧])

11) 同上

り活発に活動するための法人化であった。ウレシパクラブ設立から2014年の法人化以降もその方針は変わらず、現在に至っている。

一方、札幌大学ホームページの「沿革」¹²⁾のページには「2010年「ウレシパ・プロジェクト」発足(大学)」とある。つまり、このことから、ウレシパ・プロジェクトはウレシパクラブが独自に行っているものではなく、大学との協力のもと実施されているプロジェクトということが確認できる。実際には札幌大学とウレシパクラブは2020年12月に包括連携・協力協定を締結し、その関係を強化している。ウレシパクラブの活動と連動するように、アイヌ文化を実践的に学ぶことに関して札幌大学は2010年以降、拡大し続けている。正課授業としても科目数は倍増¹³⁾し、アイヌ文化教育研究センターも設置した。

7. ウレシパクラブの内部で

7.1 ウレシパ奨学生以外のアイヌ民族

ウレシパ・プロジェクトが始まる以前には、札幌大学にはウレシパ奨学生は存在しなかった。ただ、それはウレシパ奨学生が存在しなかったというだけで、アイヌ民族の子弟である学生が存在しなかったというわけではない。この点については誤解されがちではあるが、重要なのであえて言及したい。

ウレシパ・プロジェクトが始まり、ウレシパ奨学生が札幌大学に入学し、ウレシパクラブで活動する、という道筋ができた。ウレシパ奨学生のみがウレシパクラブに在籍したわけではない。その受け皿となったのが、本田教授のゼミナールの有志である。本田教授がウレシパ・プロジェクトの立ち上げに関わったことのみならず、教授のゼミではアイヌ文化を学んでいるということもあり、親和性が高かったことから、多くの学生がウレシパクラブに参加することになる。

本田教授のゼミナールのメンバーは大半が和人であったが、その中にはアイヌ民族の子弟が含まれていた。しかし、自分がアイヌ民族であるということを周囲に対して明らかにしていなかったのである。ウレシパ奨学生が入ったことで、抵抗感が減少したようで、徐々にそのアイデンティティを明らかにしていった。その学生はウレシパクラブができたこと、自分たちの学びの幅が広がることを喜びつつも、アイヌの子弟であるにもかかわらず、ウレシパ奨学生になることができないことを残念に思っていた。

ウレシパ奨学生制度ができたことは確かにそれ以降のアイヌ子弟の学生にとっては大学進学を選択肢が増えるというメリットがある一方、制度創設のタイミングだけで自分が制度の恩恵を受けられないという現実と直面する学生が出ることは残念だが避けられないものであった。活動当初にそういった「痛み」を経験したことは、ウレシパクラブのスタートに重要な意味合いをもたらした。

12) 札幌大学ホームページ「組織図・沿革」<https://www.sapporo-u.ac.jp/univ-guide/history.html> [2024年11月10日閲覧]

13) 札幌大学文化学部シラバスによると、科目名に「アイヌ」という文言を含むものが、2010年度にはアイヌ文化論(アイヌ文化論Ⅰ・Ⅱが統合)、アイヌ文化特講、アイヌ語初級など3つである。学部制から移行し、現在は地域共創学群となっている2024年度シラバスではアイヌ語Ⅰ～Ⅵ、アイヌの歴史と言語、アイヌ文化論Ⅰ・Ⅱ、アイヌの歴史、アイヌ文学、アイヌ工芸AI・Ⅱ、アイヌ工芸BI・Ⅱ、アイヌデザイン演習、アイヌ情報発信演習などがある(アイヌ文化スペシャリスト養成プログラム asirの科目を含む)。

7.2 文化を学ぶことにおける「多様性」

ウレシパクラブではアイヌ文化学習の一環で、アイヌの歌唱や舞踊の練習・披露をしている。ウレシパクラブは一週間のうち、月曜日と木曜日の放課後に学習会を行っているが、冒頭の30分は歌唱や舞踊の練習として設定している。公演の依頼を受けて、各地で披露することもあり、その直前などは練習時間を延長したり、学習会後に自主的に練習を行っていたりもする。基本的に学生が主体となり、教える側も教わる側も、学生が担うことになる。「育て合い」の根幹部分である。

大学生である期間は基本的に4年間で限られており、それ以前に歌唱や舞踊を習った経験がなければ、0からのスタートとなる。新しいことに取り組むということは新鮮な経験であると同時に、適性がないと感じる学生にとっては大変な負担になることは想像に難くない。外部講師を招き、時にはウレシパクラブの方から出向いて、指導を受ける。

ある日、基礎的な学習として位置付けている歌唱や舞踊をしたくないという学生が出てきた。その学生はアイヌ文化が好きであるためウレシパクラブで活動したいが、歌唱や舞踊をするとなると抵抗を感じるため、違う関わり方をしたいと主張した。着物を着たくないという学生もいた。これは和人学生の事例であるが、当然起こり得る事態であった。そういった些細な出来事であっても、それと向き合い、議論し、双方が納得いくような結論を導くということを繰り返している。アイヌ子弟が歌唱や舞踊、着物の着用を忌避するということもあり得よう。

痛みを伴う和人学生の例を出すことは避け、代わりにアイヌ子弟である筆者の経験を例に紹介したい。筆者はアイヌ民族の歌や踊りが苦手であり、ウレシパクラブに入って学び始めた。ほぼ0からのスタートだった。それ以前に苫小牧アイヌ協会(旧 北海道アイヌ協会苫小牧支部)でOKI(アイヌ民族のミュージシャン)に指導を受けたことがあったが、そこで挫折して以来、苦手意識を克服することはできなかったという経験がある。ウレシパクラブに入って、懸命に努力しても上達せず、常に苦悩していた。そして「アイヌ民族であるがアイヌ民族の歌や踊りが苦手」である人物がいるということが顕在化される。言うまでもなく、周囲にも相談したし、努力も人以上にした自負はあるが、ついに克服できなかった。しかし、それがあったからこそ、その過程も含めて、共有することができるし、民族とは、文化とは、自分がどうあるべきかを考えるきっかけになるし、実際にあった事例となることができると思うに至った。余談ではあるが、歌や踊りはできなくても、母親がそのような筆者のために着物を作ってくれたことには感謝している。今、その着物はウレシパクラブで学ぶ和人の学生が着ている。

ウレシパクラブには在籍時からすでにプロとして活動している学生もいる一方で、筆者のように芸能が不得手な学生もいる。アイヌ民族と和人という民族の違いだけでなく、向き・不向きという違いもある。学生には正解を与えるのではなく、そういった差異を認識し、どのように克服するのか、どのように受容するのか、常に考え、議論するように伝えている。

7.3 「セーフスペース」としてのウレシパクラブ

2000年代になってインターネットは急激に普及し、日常的に不可欠なものとなっているが、差別はそのインターネットでも苛烈である。特にX(旧Twitter)ではその傾向が顕著である。「いいね」で賛意を表し、リポスト(旧リツイート)で再投稿が可能なシステムである。特に差別的な発言を強い口調で行うとそれに賛意が寄せられ、拡散されていく様を目にすることがある。差別される当事者はまずその差別で傷ついた後、その差別言動に賛意を示すおびたしい数を見せつけられ、悩み、二度も三度も苦しむこととなる。定期的にそれは繰り返され、一定のパターンが形成される。

それを起点として、アイヌ民族に対する差別的な集会¹⁴⁾が行われるという動きも見られた。そういった中で、現代においても先住民族教育を行うといったことがいかに困難であり、リスクを伴うかは明白であろう。

「ウレシパクラブ内にいる時は何があっても大丈夫と言う安全な空間があったので多分それですごく楽だったんだと思います。多分ウレシパの子みんなそこまで強く意識していなくてもウレシパってそういう安全な空間があるって無意識で思っていると思います」(Ohara and Okada 2023: 86-87) とウレシパクラブを卒業した学生は言う。学生生活の中でウレシパクラブに所属するアイヌ子弟の学生は差別、もしくはそれに類することに遭遇することがあると聞く。ウレシパクラブの中ではそういったことは起こらないため「セーフスペース（差別や攻撃に晒されない安全な場所）」といった側面もあるのだ。

8. ウレシパクラブを取り囲む社会

8.1 誤った知識による悪意のない攻撃

ウレシパクラブで依頼されたある学外のイベントで撤収作業時に、「アイヌは自然を愛する民族なので動物を殺さないですね？」と筆者が問われたことがある。後輩の学生がその質問を受けて困惑していたものが、回ってきた格好だった。その人物は悪意があるようには感じられず、真面目にそう考えているようだった。ただ、アイヌ民族はいまだに「狩猟民族」と言われることがあるように、狩猟自体が生活の一部であったことも事実である。

文献などでもアイヌ民族を「狩猟民族(狩猟採集民族)」と定義するものが多く見られる。しかし、それは過去の話であるし、農耕や交易も行っていたことを無視している。逆に狩猟や採集を行わないことでアイヌ民族自身をアイヌ民族から排除することになる危険性もある。そういった定義に縛り付けるのではなく、アイヌ史を確立した上で「当時の生業は」といった記述のされ方が望ましいだろうが、まだそこには至っていない。

ウレシパクラブは主催・外部のイベントなどで来場者と接する機会が多い。そういった時に上記のような質問を受けて、適切に回答することができるとどうか。学生に対して誤った認識に基づく質問がなされることはあり得るし、意図的に差別的な言葉やハラスメントが向けられる可能性もあるため、学生を守る体制は必須である。

8.2 交流の場でのヘイトスピーチ

ある都市の研究者・学生とのシンポジウムへ参加し、その後の会食の場で公的な立場の人物が「アイヌは誰でもなれる」という趣旨の発言を海外の学生に向かって、冗談めかすでもなく、真面目な論調で発言した場に居合わせたことがある。2015年の初頭であり、前出の金子快之¹⁵⁾元札幌市議のツイッターでの書き込みが問題となった翌年のことだ。それは違うと即座に否定することで事なきを得たが、海外の研究者や学生との会食の場で何気なく起こった出来事である。当該人物はそういった思想の持ち主であるから、日常的にそれに類するような発言をしていても不思議なことでは

14) 講演会「あなたもなれる？ みんなで“アイヌ”になろう？」(2019年9月21日 会場：白石区民センター)

15) その後、NHKから国民を守る党(当時)から出馬し、当選。渋谷区議を務めるが、2023年4月の選挙では落選した。

ない。タイミングとしても金子元札幌市議が問題行動を起こした翌年ということであるにもかかわらず、そのような発言が口をついて出るのはよほどのことであると推察される。金子元札幌市議のように、インターネットで「アイヌは誰でもなれる」と書き込みを行っている可能性もあろう。それはその場に限ったことではなく、日本のいたるところで起こり得ることなのだ。そういった言動がウレシパクラブの学生に向けられる危険性もある。このケースは会食の場であり、「場の空気」もある。しかし、そういった場で度し難い言動があった場合「空気を読む」べきなのは否定されるアイヌ民族の側なのだろうか。私以外のウレシパクラブの学生が参加していた可能性もあるし、そういった少数での活動の場合の対応も確認する必要がある。

8.3 研究者による容貌への偏見

ある和人研究者との会話の中で、私もアイヌ民族であることを告げると「そうなんですか？ アイヌに見えませんか」と言われたことがあった。研究者が期待するようないわゆる「アイヌ的な容貌」ではない私を、そのように評することは行動としては理解できた。「アイヌと和人の両方の出自を持つが、文化や経験による自己認識においては、そのどちらも有しておらず、私の足場はなかった」（石原 2020：13）筆者が、ウレシパクラブで学び、アイヌ民族の一員としてのアイデンティティの萌芽を自分の中に感じながら、ウレシパクラブの指導的立場にあってなお、その研究者は筆者をアイヌと見做していなかった。烈火のごとく怒ることもできたろうが、その話は流してしまった。それ以降、アイデンティティについては隠すつもりはないが、自ら明かすことには消極的である。ウレシパクラブと密接な関係にあった人物であり、現在もアイヌ民族を研究対象としている研究者が博士号を取得したことに疑問を禁じ得ないが、それは現実である。

アイヌは「民族」である。見た目についての批評は論外であるが、いまだに「民族」という概念が根付いていない日本においては起こりうることである。「民族」=「人種」と考えられがちだが、それは誤りである。「人種」という概念自体、現代においては否定されていると考えて差し支えないが、「民族」≠「人種」であることは再度確認しておく必要がある。また、北海道開拓時代において、和人が生活を苦に子供を捨てる、もしくはアイヌ民族に託すといったことが多数あった。彼らもまた、アイヌコミュニティの一員である。彼らが民族を問われた際に彼らはどう答えるべきであろうか。例えば意識的/無意識的のいずれであっても「アイヌ民族である」と答えて誰がそれを否定し得ようか。いずれにしても、決定権はアイヌ民族と当事者にあるべきであろう。

8.4 研究者によるアイヌ文化の「強制」

筆者がウレシパクラブに入って間もない頃、「アイヌ民族ならばカムイノミをするべきである」ということを研究者に強要されたことがある。言われるがまま、見よう見まねでせざるを得なかったが、違和感を禁じ得なかったし、大変に苦痛だったことを覚えている。

先述したように和人にアイヌ民族の着物を着せたり踊りを強制してはいけなし、アイヌ民族にカムイノミやそれに類することを求めたり、強要してはいけなしである。「アイヌ民族は狩猟民族であるから狩猟で生計を立てるべき」という、荒唐無稽な言説はインターネットでよく見られるものであるが、それはアイヌ否定論にも直結する。

「アイヌ民族に見えない」と同様に、「アイヌ民族ならばカムイノミをするべき」という発言が研究者によってなされているのである。アイヌ民族だからする「べき」ということを、和人であり、研究者が言うことは大変なハラスメントであろう。研究者であるがゆえに「理想のアイヌ民族像」

を自らの中に作っているのだと思われる。アイヌ文化研究が和人研究者によって占められていることが大きく、アイヌ民族が自ら「研究」することの意味をそういった現実にかかるハラスメントという側面からも考えなければいけない。

和人が和人地から蝦夷地に飛び出て、ヤウンモシリ（アイヌモシリ）を日本に組み込み、一帯に居住することとなり、人口も大きく逆転し、今に至っている。この歴史を和人は忘れてはいまいか。その過程において、アイヌ民族の文化を否定し、捨てさせ、禁じたのは和人である。それがなければ、アイヌ文化は衰退することはなかっただろう。もしくはアイヌ民族の意思によって、異なる道を歩んでいた可能性もある。現在、ウレシパクラブでカムイノミを学びたいという学生が増えてきているがそれは自発的なもので、強要されたからではない。山に入るフィールドワークの際、ウレシパクラブではカムイノミをすることが増えた。本来、文化はそのような形で継承されていくものではないのだろうか。

8.5 学内の理解・協力の必要性

現在は、札幌大学地域共創学群本田優子教授がウレシパクラブを担当する体制である。設立当初は「ウレシパ・ティーチャー」として活動に積極的にかかわる教員が学内外に複数名存在した。しかし、「ウレシパ・ティーチャー」は次第に業務が多忙になったり異動によってサポートを続けることが困難となり、疎遠になっていった。結果的には学外や遠隔地にサポーター・理解者がいるということはウレシパクラブのすそ野を広げていることにもなっている。しかし、内部的には「ウレシパ・ティーチャー」のを欠員を埋めるためのマンパワーが足りないという状況が続いている。

また、昨今直面しているのが札幌大学との関わり方である。外部からの問い合わせで「アイヌ」「ウレシパ」という言葉が付いた時点で本田教授や職員である筆者に引き継がれる。それを繰り返すことで、他の職員はアイヌやウレシパクラブに対して知る機会を失い、結果的に知識不足となる。便宜的にその体制で続けてきたが、本来は適正な研修などにより、他大学よりも教職員が一定水準を超える知識や理解を持っている必要や責任があるはずである。それを適宜行ってこなかったことにより、学内で差別やマイクロアグレッションに類するような状況が発生している。アイヌ民族である筆者もそういった環境で業務を行わざるを得ない。また、それが学生へ波及する危険性もある。教職員がアイヌ民族に対して無理解なまま、ウレシパ・プロジェクトを推進するのは困難が伴うだろう。

国立大学法人北海道大学アイヌ共生推進本部の調査にかかわった際、マイクロアグレッション等についての取り組みについても聞くことができ、本学への協力を依頼した。国立大学法人北海道大学アイヌ共生推進本部の協力を得て、2024年2月20日に初めて、教職員向けに札幌大学におけるアイヌ差別についての研修を実施するに至った。今後も継続して行う必要があると考えられるが合わせて、何よりもアイヌ民族の学生、そうでない学生も差別・ヘイトスピーチ・マイクロアグレッションといったものから守ることができる体制の構築が急務である。

9. 〈育て合う〉多文化教育

ウレシパクラブはアイヌ文化を学ぶことを通じて「育て合う」ことを軸にしつつも、様々なことを学ぶことができる場である。ハワイやニュージーランドの先住民族と交流を持つことで、彼らの文化も学ぶ。台湾先住民族との交流や台湾を訪問し先進的な先住民族政策を学ぶこともある。過去には病気によって差別された人々についても学ぶ機会があった。失われかけた伝統文化を復興させ

た人物からも学んだ。授業ではないからこそできる、多様な学びの機会が得られるのだ。知識も重要であるが、この年代での経験は人生に大きく影響する。それはインタビューでもあったが、本田教授が意図したところでもある。

ウレシパクラブは割合の変動こそあるものの、常にアイヌ民族と和人が存在するというコンセプトの団体である。アイヌ民族がウレシパクラブからいなくなったとしたら、それはウレシパクラブの終わりを意味することになるだろう。ウレシパクラブでは「想像上のアイヌ民族」を想定してなどではなく、実際にその枠組みに飛び込んでから考え、理解し、受容するのである。そういったことから、多文化教育と位置付けて差し支えないだろう。インタビューでも明らかになったが、ウレシパクラブは社会的に評価されつつも、本田教授が想定したように同時多発的にいくつもの同様の取り組みが生まれ、大きな流れを作るには至らなかった。それが故のウレシパクラブの「独自性」は重い。おそらくウレシパクラブがその活動を止めるとしたら、同様の団体ができることもなく、多文化教育の場が1つなくなるだけでなく、多文化共生の実現から少し後退することになる。存在するものが、ネガティブな意味合いでなくなるということは、単純に1-1ではなく、その積み上げてきたものを含めて否定されることで、よりマイナスの意味合いが増すことになる。

ウレシパクラブの学生たちにはアイヌ民族の学生と、そうでない和人の学生がいる。彼らが「私たち」と言う場合はそのいずれも含むことになる。外部からイベントへの出演依頼をされる時も同様である。異なる出自を持ち、異なるアイデンティティを持っている。彼らが「私たち」と言うためには当然合意が必要であり、その際に「アイヌ民族」「和人」ということを意識しながら合意を形成していくのである。それは彼らにとって特別なことではなく、普通感覚として日常的に行っている。そしてそれは在籍している時だけではなく、卒業後も続き、積み重ねられていくのである。過去形ではなく、現在進行形のものとしてそれを続け、積み重ね続けているということはこの活動の成果と言えるだろう。

このような取り組みの中で「多文化主義のもつ本質主義的「危険」性」(森茂 2009: 109)や「民族共生」の持つイデオロギー性についても留意する必要がある。文化を本質的に捉えてその文化を固定的なものとみなし、固定化、あるいはステレオタイプ化してしまう可能性がある。しばしば和人研究者によるそういった言説を目にすることがあるが、細心の注意を払うべきであろう。そういったものが文献になり、それらのコピーを再生産してきたという歴史もある。また、「民族共生」という言葉は多面的であり、様々な「イデオロギー性」を持つ。「共生」を目的化することで、民族の文化的独自性・多様性を軽視あるいは無視してしまうことや、同化主義に陥ること、もしくは新たな対立を生むことにもなりかねない。それは常について回る課題であり、陥りがちな問題である。おそらくそれは克服することはできないものであり、常に注意を払い、疑問を持ち、議論することでしか乗り越えていくことができないだろう。

ウレシパクラブは「大きな流れが生まれなかった」ことも含め、当初から想定されていたものではない。そういった意味でも完成形ではもちろんなく、上記のようなリスクや「重さ」をまといながら、15年という時間をかけてなされた多文化教育の一つの形ではあると言える。

10. 結 論

本論では、異なる民族同士がお互いのアイデンティティを認め、向き合うことというのはどういうことなのかという問いを、ウレシパクラブという多文化教育の実例を通して考えてきた。その結果、明らかになったのは前述もしたように「現在進行形であり続ける」ことである。ウレシパクラ

ブの学生たちにはアイヌ民族の学生と、そうでない和人の学生がいる。彼らが「私たち」と言い、同じことに一緒に取り組む。障害が現れた場合、その都度一緒に考え、そして克服する。そのトレーニングにも似た繰り返しで、習得するのである。お互いを排除することなく、共存し、共生するためには何が必要か。その前提に立ち、常に考え続けるのである。〈ウレシパ（育て合う）〉するためには〈ヤイコシラムスイパ¹⁶⁾（考える）〉し続けなければいけない。

10.1 「不完全」であること

前述したとおり、本田教授へのインタビューからウレシパクラブは大きな流れを作ること期待していたが、そうはならなかったことが明らかになった。本稿でもそこには何度も言及している。本田教授はその先に明るい未来を描いていたことだろうが、そうはならなかった。しかし、そこで絶望し、歩みを止めることなく、進むことを選んだということはあらためて称賛されるべきではないか。「私はシャモとして、どこでどのようにアイヌとかかわっていきけるのだろうか」（本田 1997：197）と言った女性はアイヌ民族と和人（シャモ）がアイヌ文化の学びを通じて「育て合う」団体を作った。期待通りにはならなかった。同様の取り組みをしたいと言った人々はそうしなかった。それはもはや本田教授の問題でも、ウレシパクラブの問題でもなく、周囲の問題である。周囲が踏み出さなかったこと、取り組まなかったことをそのままに、時間は経っているのだ。完成形でないからこそ、不完全だからこそ、多くの可能性を秘めているということもできよう。

10.2 「存在する」ことの意義

ウレシパ・プロジェクトを始めること、コンセプトについては明確に準備されていた。しかし、実際の内容については十分に練られていたとは言い難い。15年関わって感じるが、恐らく内容についても慎重に検討しては始めることすらできなかっただろう。前例のない取り組みである。実践して分かることも多いし、何よりも担う中心が学生なのである。想定通りには進まないことは想像に難くないし、それを検討しては終わりが見えない。「考える前に飛べ」である。そしてウレシパクラブはすでに「存在している」し「実践している」のである。この取り組みを続けることが重要なのだ。100ではないが、マイナスではなく、プラスなのである。「多文化教育の成功例」でなくても「多文化教育を実践している例」ではある。1から100の間で「存在」し、「実践し続けること」がウレシパクラブの一番の強みであり、存在意義であろう。

10.3 「寝た子を起こす」

アイヌ民族と和人は非対称であるし、歩んできた歴史が異なる。その非対称性は和人によってもたらされたものであった。それはマジョリティである和人による同化政策によってマイノリティであるアイヌの同化を「試みる」が失敗した結果であろう。マジョリティとマイノリティ、支配する側と支配される側など、様々な捉え方があろう。しかし結果として「多文化共生」と言えずとも、現実に「共存」はしているのである。「多文化共生」のために、ここから始められることは多いはずである。

16) 「ヤイコシラムスイパ」は「考える」という意味のアイヌ語の複数形であり、「自分で自分の心を揺らす」と解されている。単数形は「ヤイコシラムスイエ」であるが、アイヌ語では主語の数やその頻度で単数・複数を使い分けるため、本稿では複数形で記載した。

ウレシパクラブは設立以来、15年が経つが多くのOBOGを輩出した。無事卒業し、就職した者も多いが、家庭の事情等であきらめざるを得なかった者、1年という期間限定で活動した者もいて、一様ではない。また、アイヌ子弟だけではなく、和人もまた同様である。個人のプライバシーもあるため、カウントが困難である。設立当初は当然存在しなかったOBOGは内側からではなく、外側から関わることになる。そこには上記のような在籍期間が短期間であった者も含む。アイヌ語の言語復興や文化復興、アイヌ文化の産業化といったことに仕事として携わっているOBOGがいる。そういった存在は間違いなく、ウレシパクラブにとって大きな影響を与えているし、今後もより存在感を増すだろう。

ウレシパクラブは「概念」ではなく「現在進行形の存在」である。そのため、今後も変化していくことだろう。マイクロアグレッションを含む差別の問題、ジェンダーの問題など、過去にはなかったもの、変化したもの、新たなものなどに対してアップデートをして、対応していかなければならない。ウレシパクラブの学生が活動の中心、「核」であることは述べたが、「育て合う」べきは彼らだけではない。様々な形でかかわる周囲もまた、同様である。特に差別やマイクロアグレッションについては彼ら以上に、周囲が警戒すべき事柄である。アイヌ民族はウレシパクラブの中だけに存在するのではない。彼らを認識した以上、外部に対してもそういった眼差しを持つようになるはずであるし、そうあるべきである。

そうすると、アイヌ民族のアイデンティティだけでなく、和人のアイデンティティもまた、考えなければいけない。アイヌのアイデンティティだけを一方的に「配慮」することでは変わることができないのである。「アイヌとは誰か」と同時に「和人とは誰か」を考え、お互いに「育て合う」という視点が重要なのだ。アイヌの存在が「寝た子」と言われていた頃、同時に和人も寝ていたのかも知れない。そうであれば、両方を起こして「育て合う」べきである。もちろんアイヌか和人の「どちらか」ではなく「どちらでもない」もしくは「どちらも」ということもあり得る。

本来、多文化教育は早い段階で始めることが理想であるが、現実的には小中高校レベルの教育には柔軟性に欠ける。そういった意味ではタイミングとしては遅いことは否めないが、多様な要素を取り込みやすい大学はむしろ、可能性があるということだ。北海道にある大学は私大だけではなく国公立大も、ウレシパクラブのような取り組みをまず始めるべきなのである。また、それが出来なくても小さな規模から「育て合う」ことは可能なはずだ。

参考文献

- Ohara, Yumiko and Okada, Yuki (2023) "Creation and Expansion of a Safe Place to Be Ainu: The Urespa Project" In *Discourses of Identity: Language Learning, Teaching, and Reclamation Perspectives in Japan*, edited by Martin Mielick, Ryuko Kubota, Luke Lawrence. Palgrave Macmillan.
- 石原真衣 (2018) 「沈黙を問う：「サイレント・アイヌ」というもうひとつの先住民問題」『北方人文研究』11：3-12
- 石原真衣 (2020) 『〈沈黙〉の自伝的民族誌（オートエスノグラフィー）サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会
- 岩佐奈々子 (2019) 「アイヌ民族の人々の主体形成につながる創造的学習：課題提起学習としての“Simulation Game, Project PAL”の開発と実践」(PDF) https://researchmap.jp/HU_Nanako_Iwasa/published_papers/34090394

- 江淵一公 (1994) 「多文化教育の概念と実践的展開—アメリカの場合を中心として」『教育学研究』61(3): 222-232
- 小川正人 (1997) 『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学出版会
- 海保嶺夫 (2006) 『エゾの歴史』講談社学術文庫
- 加藤博文・鈴木建治編 (2012) 『新しいアイヌ史の構築 先史編 古代編 中世編「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- 岸田由美 (2001) 「在日韓国・朝鮮人教育—共生教育的観点からみた発展と課題」天野正治・村田翼夫編著『多文化共生社会の教育』玉川大学出版部
- 桑原真人・川上淳 (2011) 『北海道の歴史がわかる本』亜細亜社
- 小松博子 (1995) 「アイヌ文化を楽しく—小学校の多文化教育—」少数民族懇談会編 (1999) 『ポロ・リムセー少数民族懇談会 23 年の歩み—』アイワード
- 清水裕二 (2014) 「アイヌ民族大学の創設を求めて」日本社会教育学会年報編集委員会編『アイヌ民族・先住民族教育の現在 (日本の社会教育 第 58 集)』東洋館出版社
- 少数民族懇談会編 (1999) 『ポロ・リムセー少数民族懇談会 23 年の歩み—』アイワード
- 瀬川拓郎 (2016) 『アイヌと縄文—もうひとつの日本の歴史』ちくま書房
- 田辺陽子 (2022) 「明治期におけるキリスト教伝道とアイヌ民族——函館アイヌ学校を事例に——」『WASEDA RILAS JOURNAL NO.9』早稲田大学総合人文科学研究センター運営委員会編 早稲田大学総合人文科学研究センター
- 常本照樹 (2011) 『アイヌ民族と教育政策：新しいアイヌ政策の流れのなかで』札幌大学附属総合研究所
- 中村康利 (2010) 「労働と収入の実態」『現代アイヌの生活と意識：2008 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』：27-48、北海道大学アイヌ・先住民族研究センター
- 日本社会教育学会年報編集委員会編 (2014) 『アイヌ民族・先住民族教育の現在』東洋館出版社
- 朴三石 (1997) 『日本のなかの朝鮮学校 21 世紀にはばたく』朝鮮青年社
- 北海道大学アイヌ・先住民族研究センター (2010) 『現代アイヌの生活と意識：2008 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』札幌：北海道大学アイヌ・先住民族研究センター
- 本田優子 (1997) 『二つの風の谷』筑摩書房
- 本田優子 (2013) 「ウレシパ・プロジェクトについて」札幌大学ウレシパクラブ編『ウレシパ・オルシペ—アイヌ文化で育てあう日々—』かりん舎
- モコットウナシ (2019) 「大学を開く—アイヌ学／和人学をめざして」『北海道大学もうひとつのキャンパスマップ』北大 ACM プロジェクト編 寿郎社
- 前田耕司 (2013a) 「大学開放としての札幌大学のウレシパ学習の取り組み—アイヌ民族の若者のエンパワーメントをめざす産学連携のプロジェクト」『国際教育』19: 126-130
- 前田耕司 (2013b) 「ウレシパでつながるアイヌ民族と和人の若者—自己肯定感育む多文化共生の『育て合い』の学習」『学習社会研究』2: 8-19
- 森茂岳雄 (2009) 「多文化教育のカリキュラム開発と文化人類学：学校における多文化共生の実践にむけて」『文化人類学』2009 年 74 巻 1 号 p.96-115

Multicultural Education of Urespa (Nurturing Together): An Ethnography of the Urespa Club at Sapporo University

Yuki OKADA

(Graduate School of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)

This paper investigates the nature of multicultural education pertaining to the Ainu people in contemporary Japan, utilizing an ethnographic study of the Urespa Club at Sapporo University. It commences with an overview of the historical relationship between the Ainu and the “Wajin”, alongside the present circumstances of the Ainu people. Subsequently, the historical trajectory and current state of Ainu-related education are examined, followed by a detailed account of the Urespa Club’s establishment and activities. The Urespa Club’s initiatives, grounded in the philosophy of “mutual nurturing” between the Ainu and “Wajin”, exemplify a pioneering approach to multicultural education. Through an analysis of these practices, this paper aims to illuminate novel possibilities for multicultural education within the Urespa Club context.